

平成22年度文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン」
自然体験活動指導者養成事業 補助指導者養成研修会
～親子で体験活動にチャレンジ！～

参加者は、親子で体験活動に挑戦したことにより、その楽しさを実感するとともにその意義を理解することができました。そして保護者たちは、補助指導者として、子どもの体験活動を支援する立場で活躍しようとする意志を強く持ちました。

1. 事業実施までの経緯

子どもたちの豊かな心をはぐくみ、生きる力を身につけさせるために、青少年に対する体験活動の重要性が高まっている。平成19年には、教育再生会議の「社会総がかりで教育再生を―第二次報告書―」において「小学校で1週間の集団宿泊体験や自然体験・農林漁業体験の実施」が、また、「経済財政改革の基本方針2007」においても「小学校で1週間の自然体験の実施」が提言された。さらに、平成20年1月の中央教育審議会答申において、「体験活動は、学期中や長期休業期間中に一定期間（例えば1週間(5日間)程度)にわたって行うことにより、一層意義が深まるとともに、高い教育効果が得られる」と示され、平成20年3月に公示された新しい学習指導要領においても「体験活動の充実」が盛り込まれている。これらを受けて文部科学省は、「青少年体験活動総合プラン」で、指導者養成とプログラム開発に取り組んでいる。国立青少年教育振興機構の27施設をはじめとする指導者養成研修実施機関等では、文部科学省が制定した「指導者養成カリキュラム」に基づいた養成研修を実施しており、修了した方々を小学校等に紹介することとしている。今後より一層、学校教育現場に“体験活動の充実”と“長期にわたる体験活動の実践”が求められることから、各小学校で長期自然体験活動を実践する場合に必要な指導者の育成を目的とし、教員・社会教育関係者及び自然体験活動に興味・関心のある方を参加対象として、今回の養成研修会を実施することとなった。

当施設でも平成20年度から自然体験活動指導者養成研修会を毎年2回ずつ実施し、今年度で3年目となる。昨年度まではカヌーや野外炊飯、炭焼き等、当所で普段行われている体験活動のプログラムを活用することで、指導者を養成してきた。しかし、参加者は青少年教育関係者や大学生が中心であり、新しい参加者層を開拓していくことが課題となっていた。

今回の補助指導者養成研修会では、例年参加者が多い親子事業からヒントを得て、3年生以上の小学生の保護者（親子同伴）を対象に事業を実施した。

2. ね ら い

さまざまな体験活動を経験することにより、その楽しさを実感するとともに、子どもとのふれあいや参加者相互のふれあいを通して、豊かな心を育む。

※「小学校長期自然体験活動」において実施される教育効果の高い自然体験・生活体験活動の補助を行う指導者養成を兼ねる。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4. 後 援 愛媛県教育委員会、愛媛県PTA連合会

5. 期 日 平成22年9月11日（土）～9月12日（日）

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家

7. 参加人数 3年生以上の小学生の保護者23名、小学生25名 合計48名
(募集：3年生以上の小学生の保護者とその子ども20組)

8. 講 師 堺雅子氏 (えひめ障害者就業・生活支援センター所長)
田中弘氏 (中予教育事務所社会教育課長)
松井康之氏 (大洲市立河辺中学校校長)
清水浩氏・清水淳子氏 (国際竹とんぼ協会会員)
有田信彦氏 (愛媛県山岳連盟副会長)
大洲市カヌー協会
国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

8:30		9:00		9:15		10:45		12:30		14:00		17:20		19:00		20:30		22:30	
11 日 (土)	受付	開講式	大人	講義「学校教育における体験活動の意義」	作って遊べる竹とんぼ作り	昼食	カヌーにチャレンジ!	夕休憩	秋の星空観察	自由交流	就寝								
			子ども	なかまづくりゲーム															
6:30		7:00		9:00		10:30		14:30		15:00									
12 日 (日)	起床	朝食準備	大人	講義「教育課程と体験活動の関連性」	野外でクッキング ※媛パーク作り	閉講式	解散	※体験活動は安全管理を含む。											
			子ども	クライミング															

10. 活動内容

〈第1日(9月11日(土))〉

「開講式」 (9:00~9:15)

最初に主催者である国立大洲青少年交流の家所長より挨拶を行った。その中で、今回の事業が「小学校長期自然体験活動」において実施される教育効果の高い自然体験・生活体験活動の補助を行う指導者養成を兼ねているとの説明があった。

【保護者】講義「学校教育における体験活動の意義」 堺雅子氏 (9:15~10:45)

体験活動に造詣が深く、学校現場での経験も豊富な堺氏が、保護者を対象に講義を行った。その中で堺氏は、自立した子どもを育てるためには、体験活動の積み重ねが必要だと述べた。特に一番身近な体験活動である家事を継続的に子どもに手伝わせることが、子どもにとって大きな力になると強調した。そして、堺氏もかかわった「御五神島キャンプ」をまとめたDVDを視聴し、その意義を説明した。堺氏が最後に述べた言葉である「体験したことは力になる」は、保護者の心に深く刻まれた。



【子ども】「なかまづくりゲーム」 国立大洲青少年交流の家職員（9：15～10：45）

保護者が講義を受講している間、子どもたちは、初めて出会う仲間たちとの距離を縮めることを目的に「なかまづくりゲーム」を行った。最初は緊張していた子どもたちもゲームを進める中で、次第に打ち解けていった。ゲーム終了後、自主的に子ども同士で遊ぶ姿が見られるなど、その関係を深める良い機会となった時間であった。



「作って遊べる竹とんぼ作り」 清水浩氏・清水淳子氏（10：45～12：30）

親子で協力する最初の体験活動として、竹とんぼづくりを行った。国際竹とんぼ協会の清水氏が、まず保護者にその作り方を伝授した。その中で清水氏は、子どもが刃物を扱う際の注意点にも触れ、安全管理についての意識を高めることの必要性を強調した。その後、保護者が子どもに作り方を教える形で、竹とんぼを製作した。刃物の扱いに慣れていなかった子どもたちも、保護者のサポートのもと、少しずつその技術を高め、安全に刃物を使いこなすことができた。完成後は、ふれあい広場で「竹とんぼ飛ばし大会」を行った。保護者も子どもも同じ目線で、夢中になって竹とんぼ飛ばしを楽しんだ。



「カヌーにチャレンジ！」 大洲市カヌー協会（14：00～17：20）

午後からは、国立大洲青少年交流の家の代表的なプログラムであるカヌーを体験した。大洲市カヌー協会の講師の指導のもと、カヌーについての基礎知識やパドルの使い方、乗艇方法について学んだ後、実際にカヌーに乗艇した。カヌーは初めての参加者もいたが、上達が早かったこともあり、ミニツアーリングを実施した。ミニツアーリングの中で参加者は、親子でのふれあいを楽しみながら、肱川周辺の自然を味わうことができた。その後、安全管理講習の一環として沈脱から再乗艇までを学び、実際に体験した。保護者は、危険を伴うプログラムであるカヌーを実際に指導する立場になったつもりで、真剣に講習に取り組み、その技術を向上させることができた。



「秋の星空観察」 松井康之氏（19：00～20：30）

夜は、松井康之氏による星空観察を実施した。松井氏からは、月や夏から秋にかけての星座の魅力について、分かりやすい解説があった。特に、参加者にとって身近な月や天の川に話が及んだ際には、子どもたちから大きな反応があった。その後、実際に望遠鏡を使って月や星の観察を行った。保護者は、このプログラムを通して、簡単な望遠鏡の使い方をマスターするなど、星空観察の指導法について詳しく学ぶことができた。



〈第2日（9月12日（日））〉

【保護者】講義「教育課程と体験活動の関連性」 田中弘氏（9：00～10：30）

学校教育および社会教育の経験が豊富な田中氏が、保護者を対象に講義を行った。田中氏は、参加者に「小学校時代の思い出は何か。」と問いかけ、その多くが五感を通して学んだものや感動したものであり、五感を多く使う体験活動の重要性を訴えた。そして、子どもたちにとって貴重な学校での体験活動がより充実したものになるよう、保護者にも積極的に協力して欲しいと強調した。保護者にとって、学校教育と社会教育における体験活動の位置づけを明らかにするよい機会となった。



【子ども】「クライミング」 有田信彦氏（9：00～10：30）

子どもたちは、愛媛県山岳連盟副会長で、当施設の研修指導員としても活躍している有田氏の指導のもと、クライミングを体験した。クライミングの心構えやクライミングウォールの登り方を学んだ後、ハーネスを着用して8メートルのクライミングウォールに挑戦した。懸命に最上段を目指してチャレンジしたり、友人を応援したりする姿が見られ、子どもにとって充実した体験活動の時間となった。



「野外でクッキング（媛ポーク丼作り）」 国立大洲青少年交流の家職員（10：30～14：30）

最後の体験活動プログラムは、愛媛名産の媛ポークを材料とした「媛ポーク丼作り」である。親子や家族同士で力を合わせて1つのものを作り上げる、「協力する」ことの大切さを学ぶことを目的として、このプログラムを設定した。野外炊飯場で6人ずつの班に分かれた参加者は、火を起こす係、米を研ぐ係、材料を切る係、食器を準備する係等に別れて、班員同士での連携をうまくとりながら、作業をすることができた。子どもたちも慣れない包丁を使ったり、火おこしにチャレンジするなど、積極的に作業に取り組んだ。完成後は、班員と一緒に媛ポーク丼に舌鼓を打った。参加者は、各班のオリジナル媛ポーク丼の味に満足な様子であった。食後は、全員で協力して後片付けを行った。事前に設定した「協力する」という目的を達成できたプログラムとなった。



「閉講式」 (14:30~15:00)

主催者である国立大洲青少年交流の家次長より挨拶を行った。その後、自然体験活動の補助指導者として登録される保護者に「修了証」が手渡された。1泊2日のプログラムを終え、修了証を手にした保護者は、これから自然体験活動にかかわる者としての自覚を深めている様子であった。



11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【大人】

*満足：78.3% *やや満足：21.7% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- 盛りだくさんでいろんな体験をさせていただきました。
- 楽しく過ごすことができました。少しホッとする時が欲しかったです。(少し忙しかった。ハードだったが、満足。)
- 子どもが自由に交流できる場でよかったと思います。
- もう少し他の親子同士と話をする機会があればよかったです。
- 整った環境を提供していただけて、日頃個人ではできそうにない体験を堪能させていただきました。次の世代のお手伝いをしたいと感じました。

【子ども】

*満足：72.0% *やや満足：28.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- 友達作りは、こんなに簡単に友達ができるんだと思いました。いい思い出ができた。また機会があれば参加したい。
- いろんなことにチャレンジして楽しかった。
- 一昨年とは違う体験ができたので楽しかった。来年ここに来るのが楽しみです。
- 職員さんの優しさを感じた。明るく活動ができた。友達が増えることに気づき、よかった。また来てみたい。
- カヌーは沈を経験できてよかった。クライミングは怖かったけど、全部最初はいけた。

12. 成果と課題

【成果1】新しい参加層を開拓できたこと

事業前のねらい通り、小学校3年生以上の保護者23名の参加を得ることができた。これまで中心であった青少年教育関係者や大学生以外の新たな参加者層を開拓し、補助指導者として登録もらえたことは大きな成果の1つだと考えている。

【成果2】幅広い層の人々に体験活動の魅力を伝えることができたこと

今回の事業では、普段、当施設を利用することが少ない小学校中学年やその保護者の多くの参加を得た。これは、当施設のような青少年教育施設が、幅広い層の人々に体験活動の魅力を伝えることができたという意味で、成果があったと考えている。

『課題1』プログラムの精選

プログラムの数が多くなりすぎ、参加者にとって慌ただしい事業になってしまったことが反省点である。事業後のアンケートからも「活動内容が少し多かった。」という趣旨の意見が複数あった。できるだけ多くの体験活動をしてもらい、その資質を高めて欲しいという思いから、多くのプログラムを設定したのだが、結果的に参加者にとってやや消化不良気味になってしまったようである。来年度は、まずねらいを明確にした上で、精選した内容の事業が実施できるよう努力したい。

『課題2』親子事業の運営方法を模索すること

今回の事業は、職員にとって不慣れな宿泊を伴う親子事業であったこともあり、その運営方法の難しさを感じた。それは、国立大洲青少年交流の家が「国立大洲青年の家」として開所し、主に青年を対象に事業を展開してきたことが1つの大きな原因だと考える。上記の通り、今回の事業を通して、新しい参加者層を開拓できたので、これを好機ととらえ、よりよい親子事業の運営方法を模索していきたい。来年度に向けての具体策としては、法人登録ボランティアを活用し、よりきめ細やかな参加者への配慮をしていくことなどを考えている。

『課題3』参加者同士の交流を促すこと

「参加者同士の交流の場が欲しかった。」という趣旨の意見が、事後アンケートの中にあっただ。参加者同士の交流を促すことができなかつたことも反省点だと考えている。今回の事業は、上記のような慌ただしい日程だったこともあり、参加者同士の横のつながりを持てる場を十分に設けることはできなかつた。（情報交換会は、夜遅くなることもあり、子どもへの配慮から、今年度は実施しなかつた。）来年度は、自己紹介の場を設けたり、（子どもへの配慮をした上での）情報交換会を実施したりすることで、同じ志を持つ参加者同士の絆を深められるよう配慮したいと考えている。

結果的には、いくつかの課題が残った事業となってしまったが、上記の通り、新しい参加者層を開拓し、多くの人に体験活動の魅力を知ってもらえたことには、胸を張りたいと思っている。今後も、今回の事業を学校現場で求められている人材を育成する自然体験活動指導者養成事業として、また、体験活動を通して親子のふれあいを深める事業として、更に発展させられるよう努力を重ねていく決意である。